



体験活動の指導

1 体験活動の指導の種類

■ 活動プログラムの技術的な指導

活動プログラムの指導の基盤は、やり方やルールといった技術的なことといえるでしょう。野外炊事ならば、ナタの使い方、火の付け方、調理の仕方、灰の片付け方といったことであり、活動前にしっかりと指導することが必要です。

本ガイドブックでは、活動プログラムごとに指導内容をご紹介しますので、ご覧ください。

■ 安全に関する指導

活動プログラムを指導する際は、技術的な指導とともに安全指導を行うことが必須です。指導内容には、次のようなことがあげられます。

- 危険な箇所や立ち入り禁止箇所（言い換えれば、活動エリアを明示することです）
- 危険な動植物（どんな動植物なのか、どのような危険があるのか）
- どのような行動が危険なのか、どうしたら防ぐことができるのか
- 事故が起こったときにどうすればよいのか
- 自分の安全は自分で守ること（基盤となることです）

こうしたことを活動前に具体的に指導するとともに、活動中にも絶えず注意を払い危険を察知したら時機を逃さずに指導することが必要です。

■ 「目的」に応じた指導

活動プログラムには、それぞれ固有の教育的な効果があります。野外炊事ならば「自然の中で調理して食べることの楽しさを味わう」といったことです。

一方、活動プログラムを、特定の教育目的・目標を達成するための「手段」(方法)として捉え実施することもできます。そうした場合は、教育効果をより高めるための指導方法があり、目的によって様々な工夫をこらすことが必要です。

2 「目的」に応じた指導方法の例

■ 「教える」(スキルの習得)指導と「気付く」(価値の探求)指導

登山の技術であるとか、ナタを使った薪の割り方といったスキルを習得するようなことは、しっかりと教えることが必要です。基礎的なことを教えた上で練習（試行錯誤）を繰り返すことで上達するのであって、いきなりやらせてしまっただけでは事故につながります。

一方、「協力することは大切である」といったことはどうでしょうか。「知識」(言葉)として知ってはいても、そのことを体感していないと実際に協力することができないのではないのでしょうか。このような価値の探求を目的とした場合は、活動プログラムを通して気付き・発見するような指導が必要です。その際の留意点としては、プログラムに余裕を持ち（多くの活動を行わずに時間的に余裕を持つ）失敗を許容し試行錯誤させること、また、指導者はすぐに答えを教えたり助言したりするのではなく、参加者が気付くことを「待つ」という姿勢を持つことなどが考えられます。

■ 自然に親しむ五感に働きかける指導

教育基本法では、教育の目標の一つとして「生命を尊び、自然を大切にし、環境の保全に寄与する態度を養うこと」と規定されています。では、どういった指導をするのでしょうか。植物図鑑を参考に樹木や草花の観察をしたり、環境問題に関する知識を学んだりといったことがあるでしょう。

また、こうした方法とは別に、五感を使って自然に触れ、感性をはぐくむ方法があります。例えば、次のような活動プログラムがあります。

□「フィールドビンゴ」

自然に触れることのできる課題を書いたビンゴカードを持って、自然散策やハイキングなどを行います。

□「私の木」

2人1組になり1人がスタート位置から目かくしをして移動し木に触れ、感触や臭いを確かめます。その後、スタートの位置に戻り、目かくしを取って、その木を探します。

□「サウンドスケッチ」

自然の音を聞いて（風の音、葉が揺れる音など）感じたままに、絵や線などで表します。

こうした自然に触れる体験活動プログラムは、公益社団法人日本シェアリングネイチャー協会が普及していますので参考にしてください。 <http://www.naturegame.or.jp/>

■ 自分を高めることや他の人とのつながりを学ぶための指導

平成20年3月に告示された『小学校学習指導要領』では、「特別活動」の項で、「体験活動を通して気付いたことなどを振り返り、まとめたり、発表し合ったりするなどの活動を充実するよう工夫すること」と記述されています。

これは、体験活動プログラムの活動後、体験を通して気付いたことや学んだことを反芻することにより、体験で得たことの内面化を図るということです。

また、振り返りの際に、ねらいに即した視点を設定するという方法があります。例えば、「他の人とのつながりを学ぶ」ということであれば、「仲間の良さを発見しよう」として、「中心となって活動した人は誰ですか」、「雰囲気盛り上げようとしたのは誰ですか」、「仲間からの嬉しかった言葉や行動はどんなことですか」といったことについて考え、発表するような指導です。

あるいは、課題を達成するような活動の場合は、「成功した理由・失敗した理由は何ですか」、「どうしてそういうことができたのですか・できなかったのですか」というように問いを重ねて考えを深めるような指導です。

3 自然体験活動における指導の注意点

■ 指導者の立ち位置等

野外は、教室等の室内よりも参加者を集中させにくい状況にあります。指導者等は太陽の位置、風向き、気温などを考慮して指導する場所を選ばなければなりません。

- 指導者は参加者にとって太陽がまぶしくない位置に立つ（夏は日陰を選ぶ）。
- 夏は風とおしのよい涼しい場所、冬は風を遮断する場所を選ぶ。
- 気温の低いときは短時間にする。

■ 集合の隊形

野外では教室等と違って机・椅子がないので、自由な集合隊形をとることができます。縦横整列した隊形だけでなく、指導者を中心に扇型にしたり、円にしたり、指導の目的や内容に応じて選びます。

■ 説明の仕方と非言語的なコミュニケーション

説明を長々としていると参加者の集中力が低下するので、説明は明瞭・端的にします。参加者からモデルを選んで範例を示したりすると分かりやすいでしょう。

また、何より指導者等が気持ちを込めて話すことが大切です。そして、表情、声のトーン・大きさ・テンポ、服装や姿勢といった「非言語的なコミュニケーション」と呼ばれることにも留意します。

4 中央交流の家の指導

■ 「直接指導」と「間接指導」

中央交流の家の職員等が参加者に指導することを「直接指導」と呼んでいます。それに対して、中央交流の家の職員等が、指導者に指導・助言することを「間接指導」(指導者等への指導を通じて参加者を指導するという意味)と呼んでいます。

■ 「直接指導」の内容

□入所時のオリエンテーション

オリエンテーションでは、施設の使い方やルールばかりでなく、参加者の動機づけになるような話や体験活動の啓発に関する話、そして、安全に関する話などを行います。

□活動プログラムの技術指導と安全指導

中央交流の家が用意している活動プログラムを実施する際、技術的な指導ややり方、そして、安全指導を行います。例えば、野外炊事では、ナタの使い方や火の付け方などを指導し、概ね火がつくまで指導にあたります。

しかしながら、活動中ずっとその場で指導することはしていませんので、ご了承ください。

□特例としての直接指導

利用者が比較的少ない時期(冬季間)においては、「チャレンジ・ザ・ゲーム」を使ってチームビルドを行うような場合など、中央交流の家の職員がやり方の指導ばかりでなく、全体の指導にあたることができますので、ご相談ください。

■ 「間接指導」の内容

□プログラム相談

効果的なプログラムの立て方などの相談にあたります。また、周辺施設や自然環境、最近の事故事例等の情報をご提供します。

事前の予約が必要ですが、遠慮なくお申し込みください。なお、電話でもご相談に応じておりますので、お気軽にご連絡ください。

□活動プログラムの事前打ち合わせ

活動プログラムを実施する前に、実施(中止)の判断や進め方について確認します。

□活動プログラムの体験

実施する(予定の)活動プログラムを、事前に体験することも可能です。職員が指導にあたりますのでご相談ください。事前の予約が必要ですが、遠慮なくお申し込みください。

■ 地域指導者による指導

中央交流の家では、専門的な知識や技術をお持ちの地域の方に参加者への指導をお願いしています。ほとんどの方は本職を持ちながらボランティア的にご指導くださっておりますので、指導謝金は必要ですが、金額は一般的な料金よりも低くなっています。

なお、事前の申込みが必要です。

参考 ー 体験活動とPDCAサイクルー

■ 「PDCAサイクル」と「体験活動の指導」

マネジメントでは、「PLAN(計画)・DO(実行)・CHECK(評価)・ACTION(改善)」というマネジメントサイクルにもとづく業務改善が有効とされています。

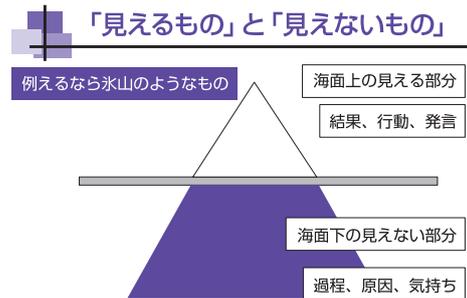
「体験活動の指導」においても、このマネジメントサイクルを応用することができます。参加者が体験(DO)を通じて感じたこと、気づいたことを学びとするためには、活動後に話し合いや発表など(CHECK)に、十分な活動時間を設けることも重要なことです。そして目指すことは、体験活動で得た学びを実社会(ふだんの生活)に適應することで(ACTION)、人間的な成長を図っていくことです。

■ 指導者の役割

- 「結果」(見えるもの)ではなく、「過程」(見えないもの)を重視すること

指導者等には「見えるもの」ばかりでなく、「見えないもの」を見ようとする姿勢が必要です。例えば、「仲間づくり」を目的にオリエンテーリングを実施した場合、得点や順位といった「結果」ではなく、どうしてその得点や順位になったのかといった「理由」を重視します。

つまり、オリエンテーリングの中で起こっていたメンバーの言動、そして、心の動きに着目します。あるいは、参加者が発した言葉や取った行動の背景には何があるのか、どんな気持ちでそうした言動を取ったのかといったことを指導者が観るのです。



- 指導者は場面に応じて役割を変えること

体験活動の指導者には場面や目的に応じて色々な役割が求められます。例えば、次のようにいられています。

- ・インストラクター：技術的な指導を行う場合
- ・インタープリター：自然や人との触れ合いを促す場合
- ・ファシリテーター：気付きや学びを促したり、考えを深めたりする場合
- ・カウンセラー：参加者の話をよく聴く場合

野外炊事のやり方を教えるときはインストラクターとなってしっかりと指導し、活動後の話し合いのときはファシリテーターとなって気付きを促すような助言を行うということです。

役割	指導者の呼称
教える	教える(インストラクター、ガイド)
気付き	解説する(インタープリター)
	促す(ファシリテーター)
	よく聴く(カウンセラー)